

目的 和服は平面形状をなしているために、特に女物長着は、人体に纏いつけるところに多くの問題点が含まれている。そこで、和服着装の立場から、着装の基本的な要因を明確にし、要因の影響を数値化することによって、着装の未経験者でも、容易に着ることを可能ならしめることが、本研究の最終目的である。今回はウール地を用いて、着装時の裾高さ並びに裄先高さを要因にとり、静止時の下半身形状及び歩行動作による裾線の変化等を計量化し、歩行のしやすさと裾の着崩れの問題を追求した。今回は縮緬地を加えて、素材による着装の審美性及び機能性を比較検討する。

方法 ウール着尺地、絹一越縮緬の2素材の長着による着装実験を行なった。着装条件は前回と同様に、裾中央(背縫い線)を人体の正中線位に定め、裾中央の床上がり高さを4段階に、裄先高さを5段階の2因子20組み合わせとした。自然立位を静止時とし、動作時は静止時を基準として、爪先点から前方爪先点の一步間を400mmステップした状態である。裾中央高さ・裄先高さによる裾線の形状変化を床面上に投影し、更に裾線の各点の位置を3次元座標でとらえた。

結果 下半身形態の審美性を評価する指標として、裾型の形態係数及び非対称性係数、着崩れの指標として、上前裄先の高さ変位及び移動距離、機能性の評価指標として、非機能性指数を求めた。測定結果について、裾中央高さと裄先高さを変数要因として解折検討を加えた。布地の素材による差異が明確な指標については、素材の性質としての関連を考察した。